この真実のいま・ここの見開きこそ、本願が私たちに真の居場所として働く事実ではないか。本願は私たちに信心の自覚をもって仏道に立たしめ（回向成就）、同時にそこに仏の国土を開く（誓願酬報）仏力（ぶつりき）である。

永遠のいのち観に立つ

往生の本質的意義が「化生（けしょう）」と説かれることは、往生が場所的移転でなく、質的に主体の転換を指す。したがって真実信心の主体を賜る（回心・えしん）ところに往生浄土の大道に立ち、そこに始まる住正定聚（じゅうしょうじょうじゅ）の往生の歩みの極まり、成仏を「臨終一念の夕（ゆうべ）、大般涅槃（だいはつねはん）を超証（ちょうしょう）す」（『真宗聖典』二五〇頁）と言いきる。それは「すなわち穢身（えしん）すてはてて、法性常楽（ほっしょうじょうらく）証（しょう）せしむ」（『真宗聖典』四九六頁）、この身の依（よ）って立つ法性（ほっしょう）にかえらしめられる永遠のいのちであることを告げている。

親鸞聖人の願われた浄土は、どこかに思い画（えが）かれた世界ではなかった。どこまでも如来の本願名号による万人救済の仏事をなす、この身にはたらく国土であった。浄土が「帰依」すべき依り処（よりどころ）であり、破闇満願（はあんまんがん）の智慧の「光明」であり、教え導く「導師」であり、この世ならざる永遠のまこと「彼岸」であると説かれる所以（ゆえん）であった。故に浄土は私たちにとって「其（そ）の名号を聞く」ほかに出遇う方途はない。すでに善導も「自ら今身に浄土を聞くことを慶（よろこ）ぶ」（『般舟讃』）と、聞によってこの身にはたらく浄土との出遇いの慶喜（きょうき）を詠（うた）う。

ここに私は、いまこそ親鸞聖人以前の浄土の観念を自覚的に超えて、「聖人の願われた浄土を聞こう」と切に提起いたしたい。現代をよく生・死する活力に気づこう。